

東京藝術大学音楽学部  
論文作成の手引き

(2019年改訂)

目次

1. 一般的な注意 .....	1
1.1 用字・用語	
1.2 論文用紙、表紙、綴じ方	
1.3 印字方法	
1.4 提出原稿	
1.5 枚数制限	
1.6 出典・引用	
1.7 締切り	
2. 書式の一般的事項 .....	1
2.1 論文の構成	
2.2 論文の題目、副題、見出しについて	
2.3 ページのレイアウト	
2.4 本文の書式	
2.5 引用の仕方	
2.6 各種記号の使用法	
2.7 欧文をタイプするときの一般的注意	
3. 注の書式 .....	4
3.1 注のつけ方	
3.2 注に用いる略語	
3.3 注における文献の表記例	
4. 参考文献表の書式 .....	5
4.1 洋書	
4.1.1 単行本	
4.1.2 雑誌論文	
4.1.3 論文集のなかから	
4.1.4 学位論文	
4.1.5 事典項目	
4.2 和書	
4.2.1 単行本	
4.2.2 雑誌論文	
4.2.3 論文集のなかから	
4.2.4 翻訳論文集のなかから	
4.2.5 事典項目	
4.2.6 写本・板本（刊本）などの古文献	
4.3 楽譜	
4.4 録音・録画資料	
4.5 オンライン資料	
5. 論文要旨（学部楽理科、修士課程音楽文化学（音楽学）専攻の場合） .....	11
5.1 卒業論文の場合	
5.2 修士論文の場合	
6. 終わりに .....	11



## 1. 一般的な注意

### 1.1 用字・用語

論文は日本語で執筆し、原則として横書きとする。数字に関しては、漢数字、アラビア数字、ローマ数字などを一定の原則に基づいて適切に使い分けること。

### 1.2 論文用紙、表紙、綴じ方

- 1) コンピュータ等を用いて、A4用紙に印刷する。図版、楽譜その他のためには、必要であれば他の用紙を用いてもよい。
- 2) 正本に関しては、A4用厚手の綴込表紙を利用し（生協等で購入）、教務係指定のラベルを添付すること。綴じ方は、上綴り、2穴、紐綴じとする。縦書きの場合は右綴じ。副本に関しては、必ずしも綴込表紙を利用しなくてもよい（A4普通紙でもよい）が、各科の指示に従うこと。また、教務係指定のラベルを添付すること。副本の綴じ方は、前記の正本の綴じ方（上綴り、2穴、縦書きの場合は右綴じ）に準ずること。ただし、紐綴じでなくてもよい（リング製本等を利用してもよい）。

### 1.3 印字方法

黒色で印字する。（ただし、図表等で黒以外の色を用いることは可。）

### 1.4 提出原稿

オリジナル原稿に限る。専攻によっては複数部提出すること、あるいは副本を提出することとなっているので、教務係または各教員室の指示に従うこと。学部楽理科については、正本のほか副本を1部提出、また修士課程音楽文化学（音楽学）専攻分野は正本のほか副本を3部提出すること。

### 1.5 枚数制限

- 1) 卒業論文（主論文）：注、参考文献表、図版も含めて、A4（1頁あたり1,000字相当の場合）20～60枚（厳守）。
- 2) 修士論文：枚数は自由とする。ただし、修士課程音楽文化学（音楽学）専攻分野の主論文は、注、参考文献表、図版も含めて、A4（1頁あたり1,000字相当の場合）40～120枚程度とする。

いずれの場合も、主論文以外に必要なに応じて副論文、譜例集、図版集、音源・映像データ等を別冊付録として別途添付することができる。別冊付録には枚数制限を設けないが、常識的な範囲とする。

### 1.6 出典・引用

他人の学説、著書、論文、講義内容などを直接あるいは間接に引用する場合には、自説と区別した上、出典を明示する。

### 1.7 締切り

学事暦の締切り日を厳守のこと。定刻を過ぎて提出したものは受け付けない。楽理科の場合、論文要旨（卒業論文は和文、修士論文は和文・英文）を添付しないものは受け付けない。

楽理科の場合、要旨をCD-RまたはUSBメモリ等でも提出するが、その締切りは楽理科教員室から別途指示する。

## 2. 書式の一般的事項

### 2.1 論文の構成

次の順序に従って書式を整える。

- 1) 扉 論文題目、入学年度、学籍番号、執筆者名を明記する。
- 2) 凡例 文中の略語、略号、記号などの説明。ロシア語やアラビア語などの場合の転写法。
- 3) 目次
- 4) 序文、前書き 必要に応じて付ける。
- 5) 本文
- 6) 後書き 必要に応じて付ける。
- 7) 参考文献表
- 8) 付録等 必要に応じて付ける。

## 2.2 論文の題目、副題、見出しについて

- 1) 論文の題目は、扉（タイトルページ）に記す。副題のある場合は、二倍ダッシュを前後に付ける。

例                   バルトークの弦楽四重奏曲  
                          ——その構造と意味——

- 2) 各章または各節の見出しの付け方には、さまざまな方法があるが、信頼のおける学術論文などの方式を参考に、自身の論文に最も適切と思われる方法を選択すること。しかしその際、採用した一つの方式を終始一貫して用い、全体を統一すること。

## 2.3 ページのレイアウト

- 1) 余白は少なくとも、上35mm、左右25mm、下20mm以上とること。
- 2) 1頁の字数は、1000字程度に統一する。1行35～40字程度、1頁25～30行程度。行間を十分にとること。
- 3) 注は、原則として脚注とする。注の書き方は「3. 注の書式」（4～5頁）参照。その場合、本文との間隔を1～2行程度あけ、罫線を引くこと。
- 4) ページ番号は必ずうつこと。

## 2.4 本文の書式

- 1) 章を始めるときは、原則としてページを改める。
- 2) 章や節の見出しの部分には、前後に1～2行の余白をとる。
- 3) 改行の場合は、1字下げて書き出す。
- 4) 句点（。）、読点（、）、括弧類（『 』）（『 』）（『 』）等の符号、また注番号が行末に来たときは、次の行に送らず、その行の中に収める（ワープロソフト等の禁則処理の設定を行うこと）。
- 5) 初出の人名についてはすべて、略さずに記す（二度目以降は、略してもよい）。

## 2.5 引用の仕方

- 1) 引用のうち短いもの（2行以下）は「 」を用いて改行せずに続ける。

例   そこで、ジーフェルトもまたスカッキについて、「新しい様式にも古い様式にも無知である」<sup>1</sup>と反撃した。

- 2) 長い引用の場合（3行以上）は改行し、引用文の前後に1行、左側に数文字程度の余白をとる。

例

この点についてハインリッヒ・シュッツは、次のように述べている。

経験を積んだ作曲家が、厳格な技法なくして一曲たりとも作曲をすることはあり得ないし、これなくしては作品は（たとえそれが、音楽の素養のあまりない人々の耳には、あたかも妙なる調べのように響くことがあったとしても）、実のない殻だけの胡桃のように屑同然の価値しかないといえよう。<sup>1</sup>

つまりシュッツは、厳格な作曲技法の習得こそがまず優先されなければならないとい

## 2.6 各種記号の使用法

名 称	記 号	用 法	例	注 意
中黒	.	名詞の並列	歴史的・地域的相違	ピリオドと位置の違いに注意
ピリオド	・	1. 欧米単語の省略 2. 名前の省略	op. J. S. バッハ	ピリオドの次は半角アキにする
傍点	・・・	特に力点を置く字句	特に力点を置く	
引用符	“ ”	欧文の引用文・句		
ブラケット	[ ]	引用文への補足・修正		
丸括弧 またはパーレン	( )	補足的な説明		
かぎ括弧	「 」	1. 和文引用文 2. 雑誌論文等の和題目		
二重かぎ括弧	『 』	1. 「 」内での引用文 2. 書名、雑誌名	『音楽学』第38巻2号	
二重山括弧	《 》	作品名	カンタータ第82番《我は満ちたれり Ich habe genug》(BWV 82)	
山括弧	〈 〉	作品集の中の曲名	アリア〈わが胸復讐の怒りに燃え Der Hölle Rache kocht in meinem Herzen〉	
ハイフン	-	外国語の単語の分綴		
波ダース	～	数字の範囲を示す	1770～1827	欧文の場合は二分ダース(-)使用
二倍ダース	—	挿入句、和文タイトルの副題		原稿用紙の場合 2マス使用
リーダー	.....	中略		原稿用紙の場合には2マス 使用で1マスに3点
ルビ		ふりがな(漢字の上に)	<small>とうきょうげいじゅつだいがく</small> 東京藝術大学	

## 2.7 欧文をタイプするときの一般的注意

- 1) 参考文献表や注で文献タイトル(書名、叢書名、雑誌名、論文題目等)や作品名を記す場合、大文字と小文字の区別は以下の原則に従う。

英 語 ・タイトルと副題の頭文字、およびすべての名詞、代名詞、形容詞、動詞、副詞、従属接続詞(as, if, thatなど)の頭文字はすべて大文字とする。

・冠詞、等位接続詞(and, but, orなど)、前置詞は、これがタイトルの最初に位置しない限り小文字とする。

仏 語 タイトルと副題の頭文字、および固有名詞の頭文字は大文字にし、その他はすべて小文字にする。

独 語 タイトル、副題の頭文字、および名詞(普通名詞、固有名詞)の頭文字は大文字にする。

その他 ローマ字に翻字されたアラビア語、ロシア語などでは当該言語の慣例に従う。

- 2) コンマ (,), ピリオド (.), コロン (:), セミコロン (;) などの符号の後には、必ず半角のスペースをとる。

例 × L.v.Beethoven,W.A.Mozart and J.Haydn ○ L. v. Beethoven, W. A. Mozart and J. Haydn

ただし、略号のピリオドの後は字体によってスペースをとらない場合もある。

例 L.v.Beethoven, W.A.Mozart and J.Haydn (cf. p.233)

- 3) パーレン ( ), ブラケット [ ], 引用符 “ ” などの前後には、必ずスペースをとる。ただし、これらの後に 2) で挙げた符号が続く場合はこの限りでない。

例 × Aria“O,Mein Gott”(op.23)by Carl Schmidt ○ Aria “O, Mein Gott” (op. 23) by Carl Schmidt

- 4) 和文に欧文を挿入するときは、欧文の前後に半角のスペースをとる。

例 これらの作品は、アリア aria、ムジカ musica、ラメント lamento、マドリガーレ madrigale などと呼ばれた。

- 5) 欧文の分綴法（行末に来た単語をハイフン-で分けて次行に送ること）には、各言語によって厳格な規則があるので、それに従うこと。大抵の場合、辞書に分綴の原則が詳しく記してあるので参考にする。

### 3. 注の書式

#### 3.1 注のつけ方

- 1) 注は、原則として脚注とし、通し番号をうつ。やむを得ない場合は、節や章の末尾にまとめてもよい（後注方式）。その場合は、節または章ごとに通し番号をうつ。
- 2) 注番号は、その数字のみを当該箇所の右上に書き込む。2.5の例を参照すること。

#### 3.2 注に用いる略語

- 1) 引用文献を注で示す場合、それ以前の注ですでに挙げたものについては、下記のラテン語の略語によって記すことができる。

Ibid. = in the same book 同前

（直前の注と同一の文献の場合、これにより著者名・書名等を省略できる。）

- 2) 頻出する文献は、略号を用いて表すことができる。ただし、略号は凡例で必ず示すこと。

例 NG 2: *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*, 29 vols., 2nd ed., edited by Stanley Sadie; executive editor, John Tyrrell, London: Macmillan, 2001.

MGG 2: *Die Musik in Geschichte und Gegenwart*, 20 vols., 2nd ed., edited by Ludwig Finscher, Kassel: Bärenreiter; Stuttgart: Metzler, 1994-2008.

### 3.3 注における文献の表記例

#### 1) 洋書の場合

洋書の文献データの各要素は、参考文献表の場合と異なり基本的にコンマ(,)で区切って記す。コンマの後は、基本的に小文字で続ける。ただし、2.7 1)で示した原則によって大文字で記すべき単語は、大文字とする。以下にその表記例を示す。なお、本文・注ともに、初出の人名についてはすべて、略さずに記す(二度目以降は、略してもよい)。

1. 単行本、2. Ibid. の使い方、3. 雑誌論文、4. 論文集の一論文、5. 執筆者不明の事典項目、6. 執筆者の明らかな事典項目、7. 執筆者の明らかな事典項目(略号を用いる場合)、8. 以前に引用した書籍から再び引用する場合(タイトルを短縮することができる)

1. Rudolph Reti, *The Thematic Process in Music* (1st ed., New York: Macmillan, 1951; London: Faber, 1961), p. 235.
2. Ibid., p. 298.  
Idem, *Tonality – Atonality – Pantonality* (London, 1958, 2/1960), passim.
3. Wolfram Steude, “Das wiedergefundene Opus ultimum von Heinrich Schütz: Bemerkungen zur Quelle und zum Werk,” *Schütz-Jahrbuch* 4/5 (1982/1983): 9.
4. Giuseppe Vecchi, “La canzone strumentale e la canzone-motetto a Milano nella prima metà del Seicento,” in *La musica sacra in Lombardia nella prima metà del Seicento*, edited by A. Colzani, A. Luppi and M. Padoan, (Como: Antiquae Musicae Italicae Studiosi, 1988), p. 81.
5. *The New Harvard Dictionary of Music*, s. v. “Performance Practice,” p. 625.
6. Thomas Bösche, “Bearbeitung,” in *Die Musik in Geschichte und Gegenwart*, 2nd ed., Sachteil vol. 1, col. 1322.
7. Bösche, “Bearbeitung,” in *MGG* 2, Sachteil 1, col. 1322.
8. Steude, “Das wiedergefundene Opus ultimum,” pp. 10–11.
9. あるいはS.等一つの言語方式に統一すること。

passim 至る所に

s. v. = sub verbum ~という項目のもとに

col. = column

#### 2) 和書の場合

1. 翻訳書、2. 単行本、3. 「同前」の使い方、4. 以前に引用した書籍から再び引用する場合(タイトル等を短縮することができる)、5. 雑誌論文、6. 論文集の一論文、7. 翻訳論文集、8. 執筆者不明の事典項目、9. 執筆者の明らかな事典項目

1. カール・ガイリンガー『バッハ——その生涯と音楽』角倉一朗訳、東京：白水社、1970年、45頁。
2. 小泉文夫『日本伝統音楽の研究』東京：音楽之友社、1958年、15頁。
3. 同前、50頁。
4. ガイリンガー『バッハ』、90頁。
5. 安藤由典「筑前琵琶における構造、胴の音響的性質および音色印象の各個性間にある相互関係について」、『音楽学』第27巻2号、1981年、85～86頁。
6. 横道萬里雄「能における『越天楽今様』の摂取」、東京国立文化財研究所芸能部編『芸能の科学 芸能論考Ⅱ』東京：平凡社、1974年(芸能の科学5)、68頁。
7. ハインリヒ・ベッセラー「開拓者としてのバッハ」(Heinrich Bessler, “Bach als Wegbereiter,” 1955)、角倉一朗監訳『現代のバッハ像』東京：白水社、1976年(バッハ叢書1)、199頁。
8. 「中和韶楽」、『新訂 標準音楽事典』東京：音楽之友社、1991年、1124頁。
9. 上参郷祐康「尺八」、『音楽大事典』東京：平凡社、1982年、第3巻、1052頁。

### 4. 参考文献表の書式

本文中で引用、言及した文献、楽譜、録音・映像資料等はすべて挙げる。原則として、著者名の五十音順(欧文の場合は姓、名の順でアルファベット順)に列記する。それぞれの文献・資料ごとに改行して記す。

## 4.1 洋書

参考文献表において洋書の文献データの各要素は、注の場合と異なり、基本的にピリオド (.) で区切って記す。ピリオドの後は、基本的に大文字で続ける。

### 4.1.1 単行本

#### 1) 基本例

著者姓, 名. 書名 [イタリック体または下線]. 出版地: 出版社, 出版年.  
(出版地は都市名。複数の都市名が挙げられている場合は、最初の一つにとどめる。)

例 Schulenberg, David. *The Keyboard Music of J. S. Bach*. London: Victor Gollancz, 1993.

#### 2) 第2版以降の版の場合

著者姓, 名. 書名 [イタリック体または下線]. (1st ed., 出版地, 初版年) 版次. 編集者. 出版地: 出版社, 出版年.  
(内容や書誌情報に変更のない増刷の場合は初版として扱う。)

例1 Walker, Ernst. *A History of Music in England*. (1st ed., London, 1901) 3rd ed. by J. A. Westrup. London: Oxford University Press, 1966.

例2 Grout, Donald Jay. *A History of Western Music*. (1st ed., New York, 1960) 3rd. ed. with Claude V. Palisca. London: J. M. Dent, 1980.

例3 Müller-Blattau, Josef Maria. *Die Kompositionslehre Heinrich Schützens in der Fassung seines Schülers Christoph Bernhard*. (1st ed., Leipzig, 1926) 2nd ed. Kassel: Bärenreiter, 1963.

#### 3) 副題のある場合

コロロン (:) を使って示す。コロンの後は大文字で始める。

例 Michael, Donald. *G. Mahler: The Early Years*. London: Faber, 1980.

#### 4) 翻訳書の場合

書名のあとに原本の書名 [イタリック体または下線]、出版地、出版年を ( ) の中に記す。

例 Zarlino, Gioseffo. *The Art of Counterpoint*. (Originally published as: *Le istituzioni harmoniche, terza parte*, Venezia, 1558) Translated by Guy A. Marco and Claude V. Palisca. New Haven: Yale University Press, 1968.

#### 5) ファクシミリ版の場合

書名のあとに原本の出版地、出版年を ( ) の中に記す。

例 Marpurg, Friedrich Wilhelm. *Abhandlung von der Fuge*. (Berlin, 1753) Facsimile ed. Hildesheim: Georg Olms, 1970.

#### 6) 論文集の場合

ed. (複数の場合はeds.) により編者を示す。

例 Gevie, Peter, ed. *Music and Western Man*. London: Dent, 1958.

#### 7) 著者または編者が複数の場合

3人以内ならばそれぞれの名前をアルファベット順に列記する。その場合、最初の1名のみを姓、名の順で記し、それ以降は原文の表記の通りとする。4人以上の共著の場合は、原則として最初の1人の名にとどめ、あとは *et al.* と略記する。(et al. = et alii = and others 他)

例1 Harrison, Frank, Mantle Hood and Claude V. Palisca. *Musicology*. Englewood Cliffs, N. J. : Prentice-Hall, 1963.

例2 Lang, Paul Henry and Nathan Broder, eds. *Contemporary Music in Europe: A Comprehensive Survey*. London: J. M. Dent & Sons Ltd., 1965.



- 8) シリーズ中の1冊である場合  
( )の中にシリーズ名と巻次を記す。

例 Wolschke, Martin. *Von der Stadtpfeiferei zu Lehrlingskapelle und Sinfonieorchester*. Regensburg: Gustav Bosse, 1981. (Studien zur Musikgeschichte des 19. Jahrhunderts, 59)

- 9) 2冊以上からなる場合  
vols. によって示す。

例 Williams, Peter. *The Organ Music of J. S. Bach*. 3 vols. Cambridge: Cambridge University Press, 1980-1984. (Cambridge Studies in Music)

#### 4.1.2 雑誌論文

執筆者姓, 名. “論文題目:副題.” In 雑誌名 [イタリック体または下線] 巻次/分冊 (月 年): ページ.

例1 Breig, Werner. “Versuch einer Theorie der Bachschen Orgelfuge.” In *Musikforschung* 48/2 (1995): 14-52.

例2 Savaglio, Paula. “Polka Bands and Choral Groups: The Musical Self-Representation of Polish-Americans in Detroit.” In *Ethnomusicology* 49/1 (Winter 1996): 35-47.

#### 4.1.3 論文集のなかから

執筆者姓, 名. “論文題目.” In 論文集名 [イタリック体または下線], pp. ページ. 編者. 出版地: 出版社, 出版年.

例 Vecchi, Giuseppe. “La canzone strumentale e la canzone-motetto a Milano nella prima metà del Seicento.” In *La musica sacra in Lombardia nella prima metà del Seicento*, pp. 81-97. Edited by A. Colzani, A. Luppi and M. Padoan. Como: Antiquae Musicae Italicae Studiosi, 1988.

#### 4.1.4 学位論文

- 1) 刊行されていないもの

執筆者姓, 名. “論文題目.” 学位論文の種類, 機関名, 取得年.

(学位論文の種類は、Ph. D. diss. [= Ph. D. dissertation], master's thesisなど。)

例 Fuchs, Torsten. “Studien zur Musikpflege in der Stadt Weißenfels und am Hofe der Herzöge von Sachsen-Weißenfels: Ein Beitrag zur mitteldeutschen Musikpflege des 17. und 18. Jahrhunderts.” Ph. D. diss., Universität Halle, 1989.

- 2) 既刊の学位論文は、単行本として扱う。

(マイクロフィルムやマイクロフィッシュで出版されている場合も同様にする。)

例 Tait, Robin. *The Musical Language of Gabriel Fauré*. New York: Garland, 1989. (Outstanding Dissertations in Music from British Universities)

#### 4.1.5 事典項目

- 1) 執筆者が明らかな場合

執筆者姓, 名. “項目名.” In 事典名 [イタリック体または下線], 版次 [第2版以降のみ], 巻名, 巻次, ページ.

(有名な事典の場合、出版地、出版年などは省略できる。ただし版次は明記する。)

例1 Eggebrecht, Hans H. “Geschichte der Musik.” In *Riemann Musik Lexikon*, 12th ed., Sachteil, pp. 330-335.

例2 Brook, Barry and Jean Gribenski. “Symphonie concertante.” In *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*, 2nd ed., vol. 24, pp. 807–812.

2) 執筆者が不明の場合

事典名 [イタリック体または下線]. 版次. s. v. “項目名.” 巻次, ページ.

s. v. = sub verbum ~という項目のもとに

例 *The New Harvard Dictionary of Music*. s. v. “Performance Practice.” pp. 624–625.

## 4.2 和書

### 4.2.1 単行本

1) 基本例

著者『書名——副題』 出版地：出版社、出版年。

(出版年は西暦のみか、または西暦と元号を併記する。副題のある場合は二倍ダーシ —— で示す。)

例 船山隆『ストラヴィンスキー——二十世紀音楽の鏡像』 東京：音楽之友社、1985年。

2) 叢書中の1冊

( ) 内に叢書名を記す。

例 角倉一朗『バッハ』 東京：音楽之友社、1963年。(大作曲家・人と作品1)

3) 論文集

例 東洋音楽学会編『仏教音楽』 東京：音楽之友社、1972年。(東洋音楽選書6)

4) 翻訳書

原書の情報(初出、翻訳底本)を明記する。

例 ブーレーズ、ピエール『ブーレーズ音楽論——徒弟の覚え書き』(Pierre Boulez. *Relevés d'apprenti*. Paris, 1966) 船山隆、笠羽映子訳、東京：晶文社、1982年。

5) 翻訳論文集

例 角倉一朗監訳『現代のバッハ像』 東京：白水社、1976年。(バッハ叢書1)

### 4.2.2 雑誌論文

執筆者名「論文名」、『雑誌、紀要名』 巻号、頁。

(月刊誌の場合は巻と号を省き年月のみによって表記してもよい。)

例 服部幸三「フィゲーレンレーレについて」、『音楽学』 第7巻2号、1961年、11～31頁。

### 4.2.3 論文集のなかから

例 横道萬里雄「能における『越天楽今様』の撰取」、東京国立文化財研究所芸能部編『芸能の科学 芸能論考Ⅱ』 東京：平凡社、1974年(芸能の科学5)、65～102頁。

### 4.2.4 翻訳論文集のなかから

例 ベッセラー、ハインリヒ「開拓者としてのバッハ」(Heinrich Bessler. “Bach als Wegbereiter.” 1995)、角倉一朗監訳『現代のバッハ像』 東京：白水社、1974年(バッハ叢書1)、197～257頁。

#### 4.2.5 事典項目

##### 1) 執筆者が明らかな場合

例 上参郷祐康「尺八」、『音楽大事典』 東京：平凡社、1982年、第3巻、1052～1063頁。

##### 2) 執筆者が不明の場合

例 「中和韶楽」、『新訂 標準音楽事典』 東京：音楽之友社、1991年、1124頁。

#### 4.2.6 写本・板本（刊本）などの古文献

##### 1) 写本

「〇〇本」など通称のあるものはそれに従う。そうでない場合は、第三者がその本を特定できる程度の書誌を記述する。

例 大神惟季（伝）『懐竹抄』 写本、1冊 享保7年[1722]（奥書）写か。東京藝術大学所蔵 豊原倫秋旧蔵本。

##### 2) 板本（刊本）

基本的には写本の場合と同じ。刊記があればそれを記し、なければその旨をことわり、必要な書誌を記す。写本・板本いずれの場合も、所蔵者における整理番号のあるものはそれも併記するとよい。

例 泉南興津浜漁翁『律呂三十六声 麓の塵』 5巻 刊記なし、享保17年 [1732]（序）。東京藝術大学附属図書館所蔵（W 768.51, N, 1～5）。

#### 4.3 楽譜

##### 1) 基本例

作曲者姓、名、曲名 [イタリック体または下線]、編集者、出版地：出版社、出版年。

例 Bach, Johann Sebastian. *Inventionen und Sinfonien*. Edited by R. Steglich. Fingering by W. Lampe. München: Henle, 1954.

##### 2) シリーズのなかの1冊

( ) 内にシリーズ名を記す。

例 Mozart, Wolfgang Amadeus. *Konzert für Klavier und Orchester in A, KV. 488*. Edited by H. Beck. Kassel: Bärenreiter, 1959. (Neue Ausgabe sämtlicher Werke, Serie V: Konzerte, Werkgruppe 15, Band 7)

##### 3) 翻訳楽譜

例 バッハ、ヨーハン・セバスティアン『ヴィルヘルム・フリーデマン・バッハのためのクラヴィーア小曲集』 プラート校訂（1962）、東京：全音楽譜出版社、1980年。（バーレンライター原典版34）

##### 4) 写本楽譜

所蔵図書館名および整理番号を付ける。

例 Anonym. *Quotlibet in festo* (München, Bayerische Staatsbibliothek, Cgm, 716. f. 126).

#### 4.4 録音・録画資料

##### 1) 基本例

作曲家姓, 名. 曲名[イタリック体または下線]. 演奏者あるいは団体. レーベル名: 発売番号(資料の種類 CD, LP, DVDなど), トラック番号 [LPの場合は面]. 録音年, 発売年.

例1 Bruckner, Anton. *String Quartet in C Minor*. Bruckner Quartet. Camerata: 32 CM-256 (CD), tracks 1-4. Recorded 1991, released 1992.

例2 Praetorius, Michael. *Resonet in laudibus a 7 from "Eulogodia Sionia" (1619)*. David Munrow, director; The Early Music Consort of London. Virgin Classics: 7243 5 61289 2 7 (CD), track 10. Recorded 1973, released 1996.

例3 Berg, Alban. *Wozzeck*. Claudio Abbado, conductor; The Vienna State Opera. Pioneer LDC, Inc.: SM 115-3397 (LD). Released 1987.

例4 武満徹《ノヴェンバー・ステップス》指揮 小澤征爾、サイトウ・キネン・オーケストラ。フィリップス：PHCP-160 (CD)、トラック1。1989年録音、1991年発売。

##### 2) シリーズ、オムニバス等の一部分

###### 欧文の場合

“曲名”(曲種、種目、流派など). 演奏者. アルバム名 [イタリック体または下線]. レーベル名: 発売番号 (資料の種類CD, LP, DVDなど), トラック番号 [LPの場合は面]. 録音年, 発売年.

例 “No te dao motive” (tango). Cante by Niña de los Peines; Guitar by Manolo de Badajoz. *Cantaores famosos (Antologia del cante flamenco)*. Odeon: LALP 324 (LP), side A, band 4. N. d.

n. d. = no date 発売日不明

###### 和文の場合

《曲名》(曲種、種目、流派など) 演奏者 『アルバム名』 出版地: 出版社、レーベル名: 発売番号 (資料の種類 CD, LP, DVDなど)、トラック番号 [LPの場合は面]。録音年、発売年。

例1 《みだれ》 箏 宮城道雄 『日本古典音楽大系 第三巻 箏曲・地唄・尺八』 東京: 講談社、ビクター: SJL1 (LP)、第1面。昭和55年(1980)発売。

例2 《五会念仏作法》(浄土真宗本願寺派) 導師 大谷光真 横道万里雄他編『聲明大系5 浄土真宗』 京都: 法蔵館、日本コロムビア: GES-3690 (LP)、第1面。昭和56年(1981)録音、昭和58年(1983)発売。

#### 4.5 オンライン資料

##### 1) グローヴ音楽事典のオンライン、2) 百科事典『ブリタニカ』オンライン、3) ウィキペディア英語版

例1 *Grove Music Online*, s.v. “Toscanini, Arturo,” by David Cairns, accessed July 19, 2010, <http://www.oxfordmusiconline.com/>.

例2 *Encyclopaedia Britannica Online*, s.v. “Sibelius, Jean,” accessed July 19, 2010, <http://original.britannica.com/eb/article-9067596>.

例3 *Wikipedia*, s.v. “Stevie Nicks,” last modified July 19, 2010, [http://en.wikipedia.org/wiki/Stevie\\_Nicks](http://en.wikipedia.org/wiki/Stevie_Nicks).

## 5. 論文要旨（学部楽理科、修士課程音楽文化学（音楽学）専攻の場合）

### 5.1 卒業論文の場合

1500字以内の和文要旨を添付する。字数は要旨本文のみ、タイトル部分は数えない。

#### 和文要旨の書式

┌─── 氏名、論文題目は1字下げる。

氏名（20XX年度入学）

論文題目

──（副題のある場合）──

← 1行あける。

本文の書き始めの位置。字数はこの行から数えて1500字以内。

### 5.2 修士論文の場合

1500字以内の和文要旨（書式は卒業論文の場合と同じ）と、300語程度の英文要旨を添付する。英文要旨は、提出前に必ずネイティブ・スピーカーによるチェックを受けること。

#### 英文要旨の書式

┌─── 氏名、論文題目は1字下げる。

氏名のローマ字 例 SUMIKURA Ichiro

英文論文題目：（副題のある場合）

← 1行あける。

本文の書き始めの位置。300語程度。

## 6. 終わりに

学術的な論文において、書式の統一は不可欠である。書式の整っていない論文は、その学問的な信頼度に対する印象を著しく損なうことになる。論文、レポートを作成する際は、書式に細心の注意を払わなければならない。

もっとも、論文の書式は国によって、また専門分野によってさまざまなスタイルがあり、そのいずれが正しいと簡単に決めることはできない。しかし、一つの論文では、選ばれた一定の書式に終始一貫して従うことは、絶対に必要なことである。この手引きに提示して推奨する書式は、主として英語圏でひろく用いられているスタイルに基づいて、日本語で音楽学の論文を作成するためにふさわしいようにまとめたものである。

なお、論文の書き方については多くの書物が出版されているが、ここでは特に以下の文献を紹介する。必要があれば参考にするとよい。

- ウィンジェル、リチャードJ. 『〔改訂新版〕音楽の文章術 —— レポート作成から表現の技法まで』（Richard J. Wingell. *Writing about Music: An Introductory Guide*. Englewood Cliffs, N. J., 1990）宮澤淳一、小倉眞理訳、東京：春秋社、2014年。
- エコ、ウンベルト 『論文作法 —— 調査・研究・執筆の技術と手順』（Umberto Eco. *Come si fa una tesi di laurea*. Milano, 1970）谷口勇訳、東京：而立書房、1991年。
- 小林康夫、船曳建夫編 『知の技法』 東京：東京大学出版会、1994年。
- 斉藤孝 『増補 学術論文の技法』 東京：日本エディタースクール出版部、1988年。
- トゥラビアン、ケイトL. 『シカゴ・スタイル研究論文執筆マニュアル』沼口隆、沼口好雄訳、東京：慶應義塾大学出版会、2012年。
- 佐藤望、湯川武、横山千晶、近藤明彦 『アカデミック・スキルズ——大学生のための知的技法入門』（第2版）東京：慶應義塾大学出版会、2012年。
- *The Chicago Manual of Style*. 16th ed. Chicago: University of Chicago Press, 2010.  
Schwindt-Gross, Nocolé. *Musikwissenschaftliches Arbeiten: Hilfsmittel — Techniken — Aufgaben*. Kassel: Bärenreiter, 1992.